

Book Review

デンタルハイジーン別冊 エビデンスを臨床に！ 齲蝕予防マニュアル

眞木吉信・石塚洋一 編著

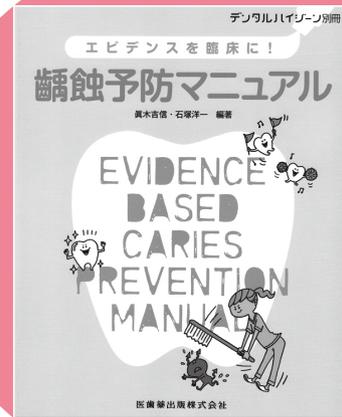


Reviewer

相田 潤 Jun Aida

(東北大学大学院歯学研究科 国際歯科保健学分野)

AB判, 144頁
オールカラー
定価(本体 3,300円+税)
医歯薬出版刊



「日本には齲蝕予防ガイドラインはないのか？」と、ロンドン大学の歯科公衆衛生学の専門家の Watt 教授に聞かれたことがある。この質問に不本意ながら「No」と答えるしかなかった。2019年7月の経験である。しかしこの「エビデンスを臨床に！ 齲蝕予防マニュアル」がすでに出版されていたならば、私の答えは違っていただろう。

そもそもこの会話の発端は、国際比較研究のディスカッションのなかで、「日本人が歯科受診回数が多く、砂糖消費量は少ないが、齲蝕は比較的多い」ことを説明していたときだった。この理由として、国際歯科連盟 (FDI) と世界保健機関 (WHO) の合同レポートのなかで「フッ化物応用の少なさ」があげられている。

なぜフッ化物応用が少ないかの理由として私が説明した内容は、口腔衛生学会の調査論文が指摘していた「歯学部・歯科大学におけるフッ化物応用の講義時間の少なさ」である。最も少な

い大学では、6年間の教育課程のなかで90分しかフッ化物応用の講義時間がないのである。このことは、出身大学による知識の差を生じさせていると考えられる。母子健康手帳に掲載された始めた幼児のフッ化物応用の質問の歯科研修医の正答率は、45%だったという報告もある。これらを説明した後に「齲蝕予防ガイドラインはないのか？」と質問されたわけである。ガイドラインがあれば、こうしたことは起こらないに違いない。

日本では「齲蝕治療ガイドライン」は日本歯科保存学会から出されており、版を重ねている。その一方で私の知る限り、予防ガイドラインは存在しない。唯一、厚生労働省から「フッ化物洗口ガイドライン」が出されているが、フッ化物応用以外の方法も含めた、エビデンスに沿って説明した包括的な齲蝕予防ガイドラインはなかったのではないだろうか。

本書はガイドラインではないが、日

本において齲蝕予防を包括的に説明できる貴重な一冊である。そして患者教育に有用なエビデンスに基づいた齲蝕の機序や予防法などの説明だけでなく、臨床の場で用いるフッ化物応用やシーラントの術式、PMTC、カリエスリスク評価など、実用書としての側面も兼ね備えている。

歯科は臨床の場で毎日患者教育を行うが、歯科医師の教育課程では治療の実技に関する講義・実習が長い間、必ずしも予防歯科・口腔衛生の教育時間は長くない。歯科衛生士教育はこうした分野に強いが、科学的に最新の内容は常に追いかけていく必要がある。さらに近年、予防歯科的な処置に保険適用が広がりつつあり、その正しい実施方法の知識は欠かせない。これらは高度な補綴治療に比べて派手さはないが、毎日の診療と患者の健康を支える屋台骨のような分野である。この分野をカバーする本書は、すべての臨床家にとって必携の内容といえるだろう。